

かりその気になり、彰子は初等科に入会することになった。

初等科には級があり、入会試験を受けて級が決まる。とはいえ、今の研修会のように、八局指して適切なクラスに入会するようなものではなかったようだ。彰子は試験の結果35級で入会することになった。35級は奨励会の6級を基準にした級であったようで、まったくの初心者というわけではない。

初等科には、彰子が入る前は紅一点だった泉智子さんがいた。六年生の彰子より下の四年生で、34級だった。金名誉九段が彰子に初等科入会を勧めたのも、この唯一の女の子に友達ができればといいという思いもあったようだった。しかし、しばらくして、泉さんは初等科を退会し、彰子が紅一点になってしまった。

初等科は月に一度だけ。それでは強くないと考えた守平は、彰子を毎週土曜日には高柳道場に通わせるようになった。将棋が子どもの習い事として認知されていなかった時代だから、子ども将棋教室などは無い。その代わり、有望な少年がプロ棋士の自宅で指導を受けるのは珍しいことではなかった。彰子も中学を卒業するころからは、道場に加えて、世田谷区池尻にある金名誉九段の自宅に月に二回くらい通って教えてもらうようになった。彰子の前には、中原誠少年（十六世名人）が金名誉九段の自宅で指導を受け、高柳門下で奨励会入りしていた。

本格的に将棋を始めた彰子を見て、親戚は口々に「なんで、女の子なのに将棋なんてやらせているの？ ピアノとか違うことにすればいいのに」と守平に言うようになった。しかし、彰子がプロ棋士に可愛がられ、少しずつ将棋の腕を上げていくことに喜ぶ守平はどう言われても気にしておらず、ますます熱心に彰子の将